Ａ大学Ｂ学部入学当初の友人づくりと大学生活

○北田　雅（京都大学大学院経済学研究科）

キーワード：友人、大学生活、学生生活調査

目　的

近年、標準学習年限を超えて修学する学部学生、すなわち留年生の存在がとりわけ問題視され始めている。平成２９年度学校基本調査（文部科学省発表）によると、平成２９年３月卒業者における所定修業年数（ここでは４年間）での卒業者数と平成２５年４月入学者を比較した場合、約８割の学生しか所定修業年数での卒業を果たしておらず、残りの２割の学部学生は修業年数を超えて大学に在籍していることが明らかとなっている。この傾向は過去２０年間ほぼ変化がなく、平成５年度入学者からの平均は７９．５±１．４（平均±標準偏差）％である。文部科学省高等教育局からの「平成２８年度以降の国立大学の学部における定員超過の抑制について（通知）」によると、国立大学においては学生定員をより適正に管理するべきであり、将来的に超過入学生分の授業料相当額の国庫納付が求められるとしている。但し、成績不振学生への個別指導を行うことを要件に当該学生分の控除をする可能性も示唆されている。これらのことから、現留年生への適切な対応や、留年生を出さない努力が急務となっている。

Ａ大学Ｂ学部では、将来成績不振により留年に至る可能性の懸念される学部学生の早期検出を目的とし、２０１４年度入学者全員を対象に web を介した学生生活実態調査を実施し、その回答内容と経年単位取得状況について追跡調査を行った。この調査結果により、将来の単位取得不振者の早期スクリーニングの可能性を模索すると共に、該当学生への留年を防ぐ目的での介入効果を検討した。

方　法

２０１４年度入学者を対象とし「２０１４年度Ｂ学部学部生に対する学生生活実態調査」とするアンケートを実施した。設問内容は入学以前の学習状況や生活面、そして大学生活についての３大項目に分け、回答項目は５８問を設定、概ね選択肢による回答とし、所要時間は１０分程度とした。回答期間は夏期休暇期間付近（２０１４年７月９日～９月３０日）であり、上記内容につき一斉メールを２回送信することで調査を行った。締め切りは２０１４年９月３０日に設定し、未回答者については個別送信を３度実施し回答を促進した。

設問項目のうち、大学入学後にできた友人数の多寡に関する質問への回答に着目し、４年間の単位取得状況との関連性についての解析を行った。

なお、「２０１４年度Ｂ学部学部生に対する学生生活実態調査」については学内の倫理審査委員会に諮り、２０１４年７月３日に委員会承認を得てから調査を実施した。

利益相反状態については、開示すべきものは無い。

結　果

２０１４年７～９月に、web を通じ「２０１４年度Ｂ学部学部生に対する学生生活実態調査」を新入生全員である２５１名を対象に実施した。回答項目は５８問設定し、概ね選択肢による回答としたが、最後まで回答した者は１２８名であり回答率は５１．０％であった。

設問項目に、「Ａ大学に入学して、よく話せる新しい友人が」「①たくさんできた」「②少しできた」と回答した学生と「③ひとりだけできた」「④ほとんどできていない」「⑤全くできていない」と回答した学生について、「①たくさんできた」「②少しできた」と回答した群を友達の多い群とし、「③ひとりだけできた」「④ほとんどできていない」「⑤全くできていない」と回答した群を友達の少ない群と２群に分け、一般教養科目とＢ学部専門科目、及び学年合計の単位取得状況について、４年間の動向を調査した。

４年間の単位取得状況を友達の多い群と友達の少ない群に分けて追跡した結果、友達の少ない群は、友達の多い群と比較して、どの学年においても単位取得が少ない結果が得られた。それは、一般教養科目、Ｂ学部専門科目のいずれにおいても見られた。

また、友達の少ない群は、授業以外の学生生活の充実度について、「あまり充実していない」や「全く充実していない」と回答する者が見られる結果が得られた。

考　察

「Ａ大学に入学して、よく話せる新しい友人」と４年間の単位取得状況の関連性について調査を行った結果、友達の少ない群の単位取得状況が統計学的に有意に良くないという事実が示された。学生生活で得られた友人から、授業内容や試験に関する情報等を得ることができる。昨今のインターネットの普及により web 上で得られる情報もあるが、現在進行中の講義や新しく着任した教員の講義の内容等、インターネットでは即座に得られない情報もありうる。友達の少ない群における授業以外の学生生活の設問について「あまり充実していない」「全く充実していない」と回答している者が見られることは、上記のような情報共有に加え、講義の受講やテストを互いに励まし、乗り切るという要素も包含していることも示していると考えられる。

Ｂ学部に改善してほしいこと（自由記載）として、「縦・横のつながりが他の学部と比べて薄い」や、「学部内での交流の場を作ってほしい」等の意見があることから、友達づくりのきっかけとなる場の提供を検討すべきであるのではないかと考えられた。

(KITADA Miyabi)